

# 赤い糸 知り 標の町



第四十弾／哲也君のジャズって生きる人生／編

京都・堀川御池を西へ。

とある街角を南へ下がった辺りに

一軒の旧家がある。

一五〇年以上にも及ぶ歲月の中、

刺繍工芸に携わるその家で

ジャズと共に青春を駆け抜け、

生きてきたひとりの男が待っていた。





小さい頃の遊び場、という二条城と神泉苑かな。二条城の堀の上を走りまわって怒られたことを憶えています。



昔、ショウノウを入ると動くブリキの船のおモチャがあってね。神泉苑の中の池に浮かべて遊んだもんです。



加藤さんの実家は1910年にイギリスへ刺繍を出品した、伝統ある家柄。150年以上前から刺繍工芸に携わるといふ。この家もかなり古く、面玄関の辺りも昔のまま。今はこういう格子のある家も少なく、貴重な存在となりつつある。



#### プロフィール

##### 加藤哲也

昭和二十二年、伝統ある刺繍工芸家の次男として生まれる。十四歳で初めてジャズに出会って以来、その人生をジャズと共に過ごした。十九歳でジャズ喫茶を開業、今日まで聴いたLPは二万枚を超える。現在は出町柳駅前でジャズ喫茶「ラッシュライフ」を経営。また、十三年前より始めた写真活動はイギリスで成功を収め、次の個展にむけて模索中の日々。フォトグラファーとして日本でのデビューも近い。ジャズと共に人生を駆け抜け、「俺は自由に生きてきた」と云いきる四十七歳。



僕は旅が好きでね。十代の頃から、全国をフラフラ歩いてた。ヘアスタイルはモヒカン刈だったな。旅先の駅で寝ると、よく人だかりで目が醒めた。ソニー・ロリンズというジャズプレイヤーのヘアスタイルを真似しただけなんだけど、はじめてそのアタマで家に帰ったときは凄く剣幕でオフクロに怒られたのを憶えている。

当時、ファッションはアイビーが流行ってた。平凡パンチって週刊誌、知ってる？あれがものすごく売れていた。ロックやフォークも流行りはじめていたけど、ジャズしか興味がなかった。今でもジャズ以外の音楽はまったくわからない。

はじめてジャズと出逢ったのは十四の時だった。隣の大学生が2枚のLPをくれてね。キヤノン・ポール・アダレイの「ワークソング」と、アート・レイキーの「危険な関係」。それを聴いたときすこい自由を感じた。今でもその時の感覚は忘れられない。

ジャズを集中して聴いてると、頭の中が真っ白になる。そして音の中からプレイヤーの姿が立ち上がってくる。ジャズのフレーズはアドリブだから、ひとつひとつの音がそのままプレイヤーの心の動きなんだ。その意識や感情を常に読んでると、やがて初めて聴いた曲でも、次の一瞬に起こる曲の展開が判るようになる。あの頃はそういうことに夢中だった。

十九歳でジャズ喫茶をはじめたのも、いつもジャズの中で暮らしていたから。ジャズはみんなでサインアップしながら聴くのが最高だから、ジャズ喫茶は理想的だった。三条通りと神宮道の間、白川橋の辺りで開店したのが最初で、店の名前はシユガーヒル。あの頃はジャズがすこく流行っていて音もガンガン鳴らしたね。今のディスクと同じ様なノリだと思ふ。興味の無い人でも一度はジャズ喫茶を訪れる、そんな時代だったんだ。

店は、広さが5坪くらいだったけど、土曜の夜はそこに五〇人くらいがやってきた。全員、立ってジャズを聴いた。そのまま夜を明かしたこともあったよ。当時はLP一枚が三千二百円。大卒の初任給が一万二、三千円位でとても高価なものだった。だからみんなジャズ喫茶に通いつめてじっくり研究した。「これや！」と思うモノだけを手にするためにね。

その後、マッコルズという名の店を哲學の道のそばで一〇年。それから洛北高校前に移った。今は出町柳の駅前で「ラッシュライフ」という店をやっている。京都で一番古い店は三十五年つづいてるブルーノートだけど、その次が僕の店じゃないかな。二十七年になるからね。

今まで自分でジャズを演奏してみたいとはあまり思わなかった。僕はプレイヤーとお客さんのちょうどまん中の立場にあるからね。それがかわつたのは、三〇歳くらいの頃かな。自転車に乗り始めた。そして自転車のゆっくりとしたスピードから見る風景がすこく自然に、身近に感じられた。その感覚に触発されて写真を撮るようになったんだ。三年前にカメラもはじめたけど、これも自転車と同じ。川の流れと僕の視線が同化していく感覚。

今年の2月にイギリスで写真展をひらいた。そこで表現したのは身の回りにある光や風や時間の移ろいと、表情。そしてカメラを構えていたときの感覚が、その自転車やカメラに乗っているときのものと同じだった。

僕の写真は抽象的だけど、普通の庶民生活の中にある風景なんだ。意識して造り上げたものではなくて、人が暮らしてゆく中で自然に出来るものを撮る。その中に、風と光が自然に入る。ジャズも本来はアメリカに居るそこらのおじさんおばさんが口ずさんだり、チャッチャチャッチャギター



# 京ごろ

豊醇な時間の流れを語る  
味噌のミュージアム。



御所の西側、一条通と室町通の角に建つ本田味噌本店の暖簾は、丸に丹の字。御所の御用をつとめた当時の丹波屋の商号が生きている。白壁土蔵造りの店構えは、天保年間の商家のたゞすまいもそのままに、遠来の客の目を惹かせる。店内には禁裏御座所御出入控や携帯用天秤測など、貴重な記念品が飾られ、ちよつとした博物館のようだ。

味噌坊主を描いたユーモラスな絵を眺めていると、「昔、御所にお品を納めるときには、一週間前から家じゅうで吟味して、白粉に身を固め、帯刃して行かはったそうです」と、やさしい声がかかる。お店の由来でも、お味噌の運び方でも、知らないことはない古株の店員さんの存在が、この場の空気を一層和やかなものにする。

## 本田味噌本店



京都市上京区室町通一条558  
電話番号●075 (441) 1121  
営業時間●午前10時～午後6時



親父は、刺繍業界では有名な人で、僕も刺繍をやりかけてたんやけれどね。まあ、兄貴が跡を継いだから、次男は好きなことせえ、というわけ(笑)。それで、好きなことやってきた。

ジャズを集中して聴いてると、頭の中が真っ白になる。やがて音の中からプレイヤーの姿がひとつひとつの音から見えてくる、プレイヤーの心の動き。あの頃はそういうことに夢中だった。立ち上がる。

小学校の裏手に二条陣屋の堀があったね、以前は国宝やったそうやけれど、そこにドッチボール当てて怒られたこともあったなあ。



弾きながら「お、これええやん」って出来上がった庶民的な音楽だ。僕が表現しようとしている写真もそれなんだ。自分のネイティブなもののなかから、ある一部分を切り取っていく作業だといえる。

ジャズをずっと聴いているとね、自分の生き方や感覚がどんどんアドリブになっていく。その時その時の閃きが常識になる。だからカメラも常に持ち歩くことはしない。撮りたい、という衝動がどんどん溜まってどうしようもなくなつて飛び出す。するとフラッシュと出逢うものがあつて、イッキに撮りきってしまう。

うと、表現は写真というものがあるから、それがメインディスプレイで、ジャズはお茶づけみたいな感じかな。イギリスでの個展はかなり好評だったみたいで、来年、もう一度トライする。そのあと日本でもやってみようと思う。その時は、君もぜひ見に来てくれ。昔のジャズが聴きたくなつたら、店を訪ねてほしい。今、持っているレコードはアメリカから取り寄せた原判。原音から最初にプレスした、一番いい状態のLP。それをマラントの真空管アンプとマッキントッシュのMC30というパワーアンプ、ターンテーブルはレノン、アルティックの602というモニタースピーカーで鳴らして。これが僕の「声」なんだ。僕の店では旨い珈琲を出すために、オーダーしてから10分ほどお客さんに待たせてもらうことにしている。その間に、空気のように流れている僕の音を感じてくれ。

文/三村 溪  
写真/ジミー西村